久留米大学

比較文化研究所年報

第 16 号

2022

比較文化研究所年報

第 17 号

2023

目　次

はじめに ・・ 1

比較文化研究所の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

活動報告（2022 年度）

1.　研究部会報告

（1）地域博物館研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

（2）文化財保存科学研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

（3）外国語教育研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

（4）地域精神保健福祉研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

（5）心理教育研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

（6）日本アジア比較文化研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

（7）筑後川流域圏研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

（8）イスラーム研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

（9）地中海地域研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

2. 研究員発表会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

3. 日誌(運営会議、研究所会議等)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

施設・設備 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

はじめに

比較文化研究所長
原口 雅浩

2021 年度の活動報告として、久留米大学比較文化研究所年報第 16 号をお届けします。

本研究所は文系大学院の設置母体として出発し、主に比較文化研究科設置に貢献するとともに教育・研究をも担ってきました。その後、2001 年から専門研究部会が設けられ、当初の 5 部会から 16 の研究部会にまで増え、現在の活動に至っています。それぞれの研究部会では、調査研究、そして地域にも開放された公開講座、シンポジウムやセミナー等の様々な研究活動を行っているところです。

これまでも比較文化研究所としての学際的・総合的研究活動の推進と、成果の社会還元を続けてきましたが、今後も一層の共同研究の進展は必要であると考えられます。

本研究所の活動が、所員や地域の方々を始め様々な関係者に支えられてきたことに感謝申し上げ、今後とも関係各位の皆様のご指導、ご支援を頂きたく宜しくお願い致します。

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987 年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」(比較文化研究所規程)であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長(現在の比較文化研究科長)が兼任しておりました。

その後 2001 年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も大学院担当教員を中心にその他の希望する専任教員にまでその枠が広げられました。

研究所では、多くの研究部会を組織しそれぞれのテーマで活発な研究活動を行うとともにその成果の公開に努めています。

ほかに研究所としての活動として、次のような研究プロジェクトを実施してきました。

まず、2006 年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を開始しました。2006 年度～2007 年度においては、大川地域、2008 年度～2009 年度においては旧三潴郡、2010 年度～2011 年度においては旧久留米市、2012 年度～2013 年度においては、うきは市および朝倉市、2014 年度からは日田地区を実施し、それぞれの地域の『研究報告書』を発行してまいりました。

以上の研究プロジェクトは 2015 年度をもって終了しています。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

2022 年度においては次のような組織・体制となっております。

組織体制

所　　長	原口　雅浩（2021.4.1～2024.3.31）
所　　員	2022 年度：78 名(専任所員なし) 大学院比較文化研究科後期博士課程の教員 22 名 大学院心理学研究科後期博士課程の教員 5 名 任意に加入する助教以上の教員 51 名
特別研究員	2022 年度：9 名

研究部会研究協力者　9 名
（文化財保存科学研究部会 8 名、筑後川流域圏研究部会 1 名）
研　究　員　　2022 年度：13 名

専任所員は、講師以上の教員で、任期制をとっています。
所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2022 年度における研究部会は以下の通りです。

1)　地域社会経済研究部会(部会長　松石達彦教授)
2)　地域博物館研究部会（部会長　吉田洋一教授）
3)　文化財保存科学研究部会（部会長　大庭卓也教授）
4)　外国語教育研究部会（部会長　李　偉教授）
5)　福祉コミュニティ研究部会（部会長　濵﨑裕子教授）
6)　地域精神保健福祉研究部会(部会長　辻丸秀策教授)
7)　民事法研究部会（部会長　石川真人教授）※休会
8)　欧州研究部会（部会長　大場　はるか准教授）※休会（在外研究）
9）心理教育研究部会（部会長　園田直子教授）
10）会計専門職研究部会（部会長　杉野博貴教授）※休会
11）日本・アジア比較文化研究部会(部会長　神本　秀爾准教授)
12）歴史科学研究部会（部会長　福山裕夫教授）
13）筑後川流域圏研究部会（部会長　浅見良露教授）
14）イスラーム研究部会（部会長　佐々木拓雄教授）
15）地中海地域研究部会（部会長　畠中　昌教准教授）

研究員は、後期博士課程を満期退学した者で、その後も研究を続け博士学位論文の作成を目指す者等が含まれます。指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

＜審議＞
比較文化研究所には、主として次の 2 つの審議組織があります。
研究所会議：所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する審議を行います。
運営会議　：所長、専任所員、研究部会長からなる組織で、16 名の委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な審議機関となります。
また、学部等との連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置

かれています。協議会は、所長、副学長、学部長、大学院研究科長、専任所員の教授を含む所員の教授 5 名によって組織されています。

＜研究成果の公表＞

『比較文化研究』

研究所の紀要として原則として年 1 回発行しています。1987 年に『比較文化研究所紀要』第 1 輯を発行し、1993 年発行の第 14 輯からは『比較文化研究』と改称しています。

また、2009 年度より査読制をとっております。

第 59 輯の主な内容は、以下の通りです。

『比較文化研究』第 59 輯(2023 年 3 月発行)

［論文］

永松 美菜子

認知症対応型共同生活介護における介護職員のメンタルヘルスの課題

許 東升・辻丸 秀策

中国における福祉学科学生の認知症の人に対する態度に関連する要因の研究

［研究ノート］

高木 恵

律令期の役所・寺社の立地に関する一考察 ： 歴史地震から見る陸奥国府・多賀城

若杉 優貴

我が国における大型店成立以降の商業地域の変容（２）

:大規模小売店舗法下における大型店規制の変化と商業地域の発展

『比較文化研究所年報』(本冊)

比較文化研究所における 1 年間の研究成果の報告および学外への周知を目的に、2008 年度(2007 年度の報告)より発行を開始しました。

各研究部会・研究員の研究成果の公表

各研究部会などにおいても出版物等による研究成果の発表が行われています。

詳細につきましては、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

また、研究員につきましては、2006 年度から年度末に研究所セミナー(活動報告会・交流会)を開催し、その年度における研究成果の発表が行われています。

なお、2022 年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の現状を鑑み、昨

年同様、開催しないこととしました。研究員研究発表会についても開催しないこととしました。ただし、次年度の研究員継続にあたっては、発表を必須条件としているため、「抄録」原稿の提出をもって、これに代えることとしました。

活動報告（2022 年度）

１．研究部会報告

地域博物館研究部会

部会長　吉田 洋一

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と協力・連携し、歴史的環境を保持しながら地域文化の次世代への継承を目的としている。

運営（研究）計画

①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2022 年度の活動報告

①史料調査

2016 年度より「(仮) 久留米藩政史料」(本学御井図書館所蔵) の調査を継続中である（詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第 10 号』2017 年、参照)。

【2022 年度調査実績（調査年月日：当日参加人数)】

2022 年 4 月 23 日（土)：3 名、6 月 18 日（土)：4 名、7 月 16 日（土)：3 名、7 月 30 日（土)：3 名、8 月 20 日（土)：4 名、9 月 17 日（土)：5 名、10 月 22 日（土)：5 名、11 月 26 日（土)：5 名、12 月 17 日（土)：5 名、2023 年 1 月 28 日（土)：3 名、2 月 18 日（土)：6 名、3 月 25 日（土)：7 名

参加者一覧（括弧内は本年度）…吉田 洋一（本学文学部)、小澤 太郎（本学大学院生)、杉谷 善子（本学研究生)、藤木 郁名（本学学生)、中川 壽賀子（八女市立図書館)、翁長 亜紀・松永 華子・西本 紗也（御井図書館委託職員)、板橋 皓世・花田 洋子（木曜古文書会）

②オマーンを知る一日（2022 年 11 月 5 日）

御井キャンパス「つながるめ」において、同日連携協定を締結したジャミール商事株式会社と本学の共催により、一般の方にオマーンのことを知っていただくイベント「オマーンを知る一日」が開催された。睡眠の第一人者である内村直尚学長による「オマーンと久留米のかけ橋～眠りと香りの素敵な関係」と題した開会挨拶、在日オマーン・スルタン国大使館モハメッド・アル・ブサイディ大使による講演、オマーンと日本の共通文化の一つである「お香」を古くから製造販売されている株式会社天年堂（久留米市）による「お香づくりのワークショップ」、文学部国際文化学科 4 年生の和泉美香さん（文学部吉田ゼミ）の卒論研究成果「香道の歴史」についての発表などが行われた。

③シンポジウム「歴史をつなぐ　高野山の文化財」（12 月 4 日）

平成 29～令和元年度に久留米市が実施した「高良大社所蔵歴史資料調査」の成果について一般向けに分かりやすく報告し、高良山の文化財を未来に伝える活動について考える機会とするイベントが行われた。開会あいさつ（高良大社宮司　竹間宗麿）、基調講演（藤田励夫（文化庁文化財第一課主任調査官）「文化財を守る仕事－古文書を中心に－」）、報告（穴井綾香（久留米市市民文化部文化財保護課）「高良大社所蔵歴史資料調査について」、松川博一（九州歴史資料館　学芸員）「高良山の歴史と文化」、松本長人（高良大社権禰宜）「御山の宝物と人々」、山口淳（高良山観光ボランティアガイドの会）「高良山のボランティアと地域活動」、吉田洋一（文学部教授）「地域の歴史遺産と大学の役割」、パネルディスカッション「守り、伝える　高良山の文化財」（コーディネーター　中野等（九州大学比較社会文化研究院教授）、以上同社務所編『高野山-その歴史と文化-』創刊号、令和 5 年 10 月、参照）

2023 年度活動計画

- 筑後川流域圏及び有明海沿岸地域を中心とした現地調査や史料の探求・公開、外部講演などの成果を、学生や市民へ還元する。
- ニューズレターの発行

文化財保存科学研究部会

部会長　大庭卓也

令和四年度は、コロナウイルス感染症の流行がまだ完全に終息しておらず、学外での催しを主とする久留米絣顕彰班の活動は自粛した。

筑後の伝統工芸の魅力を広く伝えるべく発行している『伝統工芸の国・筑後』については、予定通り第五号を発行した。今号は前号に続いて、久留米籃胎漆器塗師の井上正道氏と狩野啓子名誉教授との対談を掲載した。対談は籃胎漆器存続のための様々な課題におよび、第三号から掲載し始めた井上、狩野両氏の対談は、今号をもって完結した。

第五号は筑後地方の主要機関へ郵送するとともに、西鉄久留米駅構内の本学のパンフレット棚に設置し、さらに本部会のホームページ上にも掲載して、国内外の人々の閲覧に備えることとした。

WEB サイト

https://kurumebunkazai.jp/

外国語教育研究部会

部会長　李　偉

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグランドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2022 年度は、久留米大学外国語教育研究所と共催し、「「認知症」小説に関する研究―2004 年～2022 年の作品を中心に―」というタイトルで講演会を実施した。宋 婷(吉林大学外国語学部副教授、西南学院大学客員研究員)に講師としてお願いした。参加者は本学教員、非常勤講師及び他大学教員計 23 名であった。

演　題：「認知症」小説に関する研究―2004 年～2022 年の作品を中心に―
日　時：2023 年 1 月 22 日　木曜日　14：00～15：30
場　所：久留米大学福岡サテライト（エルガーラオフィス６F　601－602）
　　オンライン(Zoom)同時開催

講演者：宋 婷(吉林大学外国語学部副教授、西南学院大学客員研究員)
講師略歴
2016 年 吉林大学外国語学部日本言語文学研究科博士後期課程修了・博士(文学)
2007 年 吉林大学外国語学部　助教
2009 年 吉林大学外国語学部　講師
2015 年 吉林大学外国語学部　副教授
2017.3―2018.1 関西学院大学　客員研究員
2022.8―現在　西南学院大学　客員研究員
専門分野：日本戦後文学、中日比較文学
主な著書：『安岡章太郎文学研究』2021 年、中国・吉林大学出版社

講演内容

日本の平成 29 年版度高齢社会白書によると、2012 年は日本の認知症患者数が約 460 万人、高齢者人口の 15%という割合だったものが、2025 年には 5 人に 1 人、20%が認知症になるという推計がある。一方、日本を含めている全世界では認知症はどのような広がりを見せているかというと、WHO（世界保健機関）の統計によると、世界規模では 2015 年、認知症有病者数は 5,000 万人、そして、毎年 1000 万人近く、3 秒に 1 人が新たに認知症になる。

この世界的レベルの社会問題に呼応し、近年世界各国で、認知症をテーマにした小説、

エッセイ、映画などは数多く登場した。高齢化社会にいち早く入った日本は特にそうである。

本報告は『明日の記憶』が発行された 2004 年から 2022 年 6 月までの、「認知症」がテーマとなっている小説または認知症患者が主人公になっている小説、いわゆる「認知症」小説を研究対象にし、時間の軸に沿って、その作者、語り手、小説のテーマ及び物語の展開を分析したうえ、21 世紀の日本文学における「認知症」描写の軌跡と特徴を考察する。

地域精神福祉部会

部会長　辻丸秀策

研究部会の業績（2022 年）

１．中国における高齢認知症ケアに対する施設介護職員の現状に関する研究（共著）。

本研究は、中国 C 大学の福祉学科の 1～3 年生を対象とし、認知症の人に対する態度に関連する要因を検討した。その結果は、性別、学年、認知症への関心、認知症に関する知識が態度と有意な関連を示した。今後、学生の認知症への関心を高め、認知症に関する知識量を増やすことが学生の肯定的態度が促進できることが示唆された。

2．認知症高齢者の家族介護に関する研究 ： 家族介護者の語り分析を中心に（共著）。

本研究は、認知症高齢者の在宅介護の 3 事例を取り上げて検討した。その結果: ①介護者の心身負担、②男性介護者への支援の不足、③社会支援の不足の 3 点が明らかにした。今後、①男性介護者への支援の強化、②経済的困難を抱える認知症家族への支援の強化、③社会支援の充実の 3 項目の重要性が示唆された。

3．特異な人格変化と部分健忘を来したアルコール症の臨床ノート（単著）

本論文は、攻撃性の強い外罰型と同時に小心内政型が同時に認められたが、臨床検査では、にウェルニッケ・コルサコフ症候群、更には解離症状を呈していたことを、精神病理学的な視点も踏まえて論じたものである。

4．居宅介護支援事業所の主任介護支援専門員の役割における現状と課題 －管理者へのアンケート調査のテキストデータ分析より（共著）

本研究は、居宅介護支援事業所の管理者へのアンケート調査を通じて、居宅介護支援事業所の主任介護支援専門員の役割における現状と課題 をテキストデータ分析より明らかにしたものである。

心理教育部会

部会長　園田直子

心理教育部会で2022年度に実施した活動内容を報告します。本部会では「協同教育研究会」と銘打って協同教育に関する研究会を続けています。今回は第56回と第57回の活動内容を報告します。

以下に報告する研究会は、いずれも日本協同教育学会（九州支部研究会）および全国個集研（久留米地区研究会)、初年次教育学会（初年次教育実践交流会）の公認を受けています。また研究会終了後、参加者同士の交流を促すために「情報交換会」を開催しました（企画責任者　安永　悟)。

1. 第56回 協同教育研究会

テーマ：「LTD話し合い学習法」　　日時場所： 2022年12月10日(土)　御井本館13BC教室

主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援　： 久留米大学比較文化研究所

プログラム：

(1) 挨拶・導入：　13:00～13:30

(2) 講演：原点回帰・初版テキストから読み解くLTD　13:30～14:50
　安永悟・久留米大学

(3) 協同カフェ　須藤文・久留米大学　15:05～15:55

(4) 連絡・閉会：　15:55～16:00

情報交換会（飲食なし）16:00～16:50

総　括：

今回のテーマであったLTDに関しては、2種類のテキスト、つまりHill(1962)とRabow et al.(1994)との比較を通して、LTDが本来目指していた「目的と方法」がさらに明確になりました。研究会は3年ぶりに「対面」で開催しまし、28名の参加がありました。「研究会」と「情報交換会」を通して「対面」の良さを実感した研究会となりました。

2. 第57回 協同教育研究会

テーマ：「LTD話し合い学習法」　　日時場所： 2023年2月25日(土)　御井本館13BC教室

主　催： 協同教育研究所「結風」　　後　援　： 久留米大学比較文化研究所

プログラム：

(1) 挨拶・導入：　13:00～13:25

(2) 研修：看図アプローチで活性化する探究学習

鹿内信善・天子大学　　13:25～15:55

(3) 閉会・連絡　　15:55～16:00

情報交換会（飲食なし）　　16:00～16:50

総　括：

文科省(2011)は「探究的な学習」と「協同的な学習」を融合させた学習指導を推奨しています。2018 年に改訂された高校の新学習指導要領では「〇〇探究」という名称の科目がいくつか誕生しました。「看図アプローチ」は協同学習を促進する有効なツールであり、「探究的な学習」の授業づくりをサポートすることができます。今回の研究会では、看図アプローチを活用した授業モデルを体験し、探究活動の支援方法を、参加者全員で検討しました。研究会への参加者は 38 名で、情報交換会には 30 名弱の方が参加しました。

本アジア比較文化研究部会

部会長　神本秀爾

部会員による例会発表

6 月 17 日　古賀幸久　「ロシア・ウクライナ問題」

8 月 19 日　浦田義和　「日本近代作家の死生観」

10 月 7 日　神本秀爾　「ポピュラー音楽と『民謡』」

12 月 9 日　吉田勇輔　「ギリシャ神話」

部会員によるその他活動

2 月 1 日～2 月 7 日マレーシア国立図書館及びペナン博物館調査（浦田）

その他

2 月 24 日、高橋博文氏「(講和) 日本とアフガニスタンと中央ユーラシアーアフガニスタン・フィールドノート」（イスラーム研究部会・法学部法学会と共催）

筑後川流域圏研究部会

浅見良露

筑後川流域圏研究部会は、筑後川流域圏を対象として、多方面から研究を行う事を目的としている。2006 年度から 2015 年度は、比較文化研究所のプロジェクト研究として、下流域から上流域までの地域研究を行い、2016 年度に研究部会として再発足してからは、流域圏の一部または全体について、メンバー各自によるテーマ別の研究を行っている。さらに、2019 年度に「古賀河川図書館」の全蔵書が久留米大学御井図書館に寄贈されるにあたって、その活用を考える研究会をスタートさせた。

2022 年度においては、古賀河川図書館の利活用に関する共同研究およびテーマ別研究が行われた。

1. 久留米大学御井図書館「古賀邦雄河川文庫」開設記念講演会開催

土肥勲嗣

2022 年 11 月 27 日（日）、久留米大学御井本館 11A 教室において、久留米大学御井図書館の「古賀邦雄河川文庫」開設記念として、東京大学教授の沖大幹氏をお招きし、「いま、地球で何が起きているのか？異常気象と気候変動の関係」と題した講演会（久留米大学比較文化研究所筑後川流域圏研究部会主催）を開催し、約 80 名が聴講した。

講演では、二酸化炭素濃度の上昇による温暖化がこのまま推移すれば、50 年後には全人口の 23.３％にあたる 17 億人が未曾有の気象リスクにさらされるといった予測が示された。私たちの対応策としては、再生可能エネルギー導入など温室効果ガスの排出を削減するための「緩和策」、農作物の品種改良、防災対策といった気候変動の影響への「適応策」の両方が必要であり、鍵を握る途上国の温室効果ガス排出を増大させないエネルギー充足の実現の支援が大事であること、また未知の緩和技術にも期待せざるを得ず、「30 年あれば世の中は変わる・変えられる」というメッセージで講演を締めくくられた。

講演の前に「古賀邦雄河川文庫」を視察された沖教授からは、「久留米大学が水に関する資料の中心地のひとつになると思う」というコメントを頂いた。

（追記）「古賀邦雄河川文庫」にある資料は久留米大学の蔵書検索（OPAC）で検索できます。

2. テーマ別研究

(1)　野田宇太郎と檀一雄

浦田義和

小郡市出身の日本近代文学研究家野田宇太郎と久留米市や小郡市とゆかりの深い日本浪漫派作家檀一雄は、双方とも詩人としての側面を持っていた。

野田宇太郎は「文学散歩」の創始者として著名であるが、次のような抒情の詩人であっ

た。

「水鳥」は、小郡市にある詩碑に選ばれた詩である。

みづうみ　たつたひとつのやさしい部分　みづうみ　聲のない微笑の輪　羽根をつけてとび立つひそやかな愛　それを撃つな（『旅愁』1942 年 11 月）

戦時中に守るべき抒情精神を示して、高揚感さえある詩である。この抒情詩人野田宇太郎の「文学散歩」研究家への転身は、次のような理由からである。

敗戦直後の廃墟の東京で、放置されたままの森鷗外旧居の焼け跡を見て宇太郎は次のような思いを抱く。

このままに放置すれば一代の文豪鷗外の名前はおろか文学さへ消失するのではあるまいか。今こそ日本文化に対する我々の責任を果たさねばならない秋である。(『藝林閒歩』2 号、1946 年 5 月）

ここに見て取れるのは、創造というよりやはり懐旧的抒情精神である。

一方、野田宇太郎の懐旧的抒情を基にした戦後の「文学散歩」に対して、檀一雄は、戦時下放浪精神による紀行詩を表現した。

しろがねの光の湖　地にふさがり天をひたし　滔々月をからめて　捻転す　号泣す　呻吟す　大き哉　冷（すさま）じき哉　遠き哉（『従軍手帖』1944 年）

檀一雄は戦時中、中国南部の洞庭湖に立ち、大自然の生命力との同化を思念した。

以上、久留米に関わる 2 詩人の詩の違いについて分析した。

(2)　筑後川の久留米市周辺における水問題

河内俊英

筑後川はこれまで、洪水被害が繰り返されてきた。本流での洪水は、1953 年（昭和 28 年）以降、上流に下筌・松原ダム、寺内・江川ダム・小石原川ダムなどの建設による効果か、洪水は起きていない。

ところが近年筑後川では、中小河川の洪水と内水氾濫の頻発で、連続して家屋の浸水被害や農産物被害が起きている。その原因の 1 つは、集中豪雨が、かつては主に筑後川上流の山間地を中心に降っていた。しかし近年は、線状降水帯のように長時間平野部に近い地域に居座って降るように変わってきたことが挙げられる。さらに、かつて洪水被害が頻発する低平地には住宅は少なく、浸水に強い水稲やレンコンなど洪水被害に強い農作物が植えられていたことで被害は少なかった。近年そのような低平地が宅地化したこと、2 つ目はイチゴやトマト・キウリ・メロン、青物野菜等水害被害の起きやすい作物に変わってきたことが挙げられよう。

また今年田主丸の果樹園で起きた被害は、山間地の扇状地に広がったブドウ園や柿・なし等の土砂崩壊である。元々土砂崩れ被害の頻発が怖くて短期的な生産物に限定していた農産物が、多くの砂防ダム建設などにより、果樹に変わり、被害に遭いやすくなってきた結果であろう。

また水利用の面では、福岡都市圏の水不足解消のために筑後大堰が建設された。福岡都市圏は人口規模に比べて大きな河川が無く、水が不足して、大渇水が起きてきた。しかし現在は、流域外の筑後川から飲料水の半分近くを確保したこと、さらに節水の工夫、海水淡水化事業、さらにダム建設により不足は解消された。一方で水余りのような洪水が頻発しているのである。

イスラーム研究部会

部会長　佐々木 拓雄

前年度までに比べ、コロナ禍による研究活動の制限が薄らいだ2022年度であったが、出入国や国内での移動をめぐっては規制の残る国もあった。インドネシアもその一つで、コロナ前に着手していた同国研究者との共同調査研究は中断したままとなった。結局、前年度と同様、メンバー各自がそれぞれの課題に向き合い、状況に応じてできる範囲のことを進めた1年であったといえる。

浦田は、日本国内資料の桜岡孝治著『馬來の日記』複写資料を入手するとともに、2023年2月1日から2月7日まで、マレーシア国立図書館蔵書調査を実施し、日本関係資料『Stray Notes on Nippon Historical』などを複写資料として収集した。またペナン博物館にてニョニャ文化文物調査を実施し、映像資料として収集した。

佐々木は、インドネシアの近代イスラーム思想の文献調査と資料の翻訳作業に力を傾け、同じテーマを共有する国内の研究者たちと定期的に研究会を開催した。その過程において、グローバルな新自由主義（ネオリベラリズム）の広がりがムスリムの社会の労働をめぐる価値観や聖典解釈そのものに影響を与えるようになっているという重要な事実に気づき、次年度からの研究部会による取り組みに含めることを構想するようになった。

古賀は、元駐アフガニスタン日本国全権特命大使である高橋博史氏の講演会を以下の要領で実施した。アフガニスタンに関する世界的権威である同氏からは、民族問題、地域研究、国際関係、国際協力、異文化理解、イスラム問題等、多岐にわたる豊富な実践的経験や学問的研究を通した多くの興味あるお話を聴けた。同氏は大使としての任期中、先般、逝去された中村哲医師のアフガニスタンでの取り組みも支えてこられた。私たちが守るべき大事なものは何か、そして、日本や国際社会の中でこれからどのように生きることが大事であるのか等についての意義ある示唆も頂いた。約50名の大学教員、研究者、一般の外部有識者が参加された。冬期休暇中であったため学生の参加は数名であった。

地中海地域研究部会

部会長　畠中昌教

１　部会活動

2022 年度はコロナ禍がようやく終わりつつあったが、海外の研究者招聘・海外渡航もまだ制限があり、部会各メンバーができる範囲で研究活動を通じた。

また、これまでの部会活動の成果取りまとめとして、畠中が関係するスペイン・ラテンアメリカ関連の研究会・セミナー成果を比較文化研究所紀要（特別号）として発行する準備を始めたが、論文数などがまだ不足しており次年度以降も成果を蓄積して刊行につなげることとなった。

２　部会メンバーの研究成果

「ポンペイ・エルコラーノの共同研究と」（池口 守）

科研プロジェクト「エルコラーノの都市システム研究」の最終年度で，エルコラーノ遺跡管理局からの調査許可を得てチームとして調査を行い，排水設備等に関する新たな知見が得られた。ポンペイのゴミ捨て場，およびエルコラーノの下水道から採取された動物遺存体の調査（イタリア・サレント大学との共同研究）については分析結果が出ており，単著や論文の発表を計画している。一方，古代ローマ経済の特質に関する議論の高まりを受けてその動向を調査した上で，R. Saller, Pliny's Roman Economy の書評を『西洋古典学研究』に寄稿した。日本における古代ローマ史研究の動向も調査し，『史学雑誌』「回顧と展望」のローマの項を執筆した。

「日本近代文学と地中海」（浦田義和）

2022 年度の個別研究タイトルは「日本近代文学と地中海」であった。このテーマに基づいて、2022 年 3 月 18，19 日にエジプトのカイロで開催された「エジプト日本研究会第 1 回国際シンポジウムー中東地域と日本のかかわり」（主催　エジプト日本研究会：代表エジプト国立アインシャムス大学教授菊池真）で研究発表「日本近代文学とイスラーム」を実施した。

発表内容は以下の通り。

近代日本におけるイスラーム関係著述を分類すると、１，政治小説、２，千夜一夜物語、３，マホメッド伝記、４、回教研究、５、紀行文、滞在記の 5 つ分けられる。その中で、特に５、紀行文、滞在記は、外交官・軍人によるものと作家によるものに大別され、作家によるものの中で、徳富蘆花、野上弥生子、井伏鱒二、武田麟太郎の叙述が注目される。

「スペインにおける自然保護・ワインツーリズム」（畠中昌教）

2022 年度の個別研究タイトルは「スペインにおける自然保護・ワインツーリズム」であった。当初はスペイン現地調査を予定していたものの、スペイン、日本共に新型コロナウイルス感染のリスクは残り、さらにウクライナ・ロシア紛争が長期化したことから海外渡航条件は好転せず、現地調査を行うことは出来なかった。

そこで、スペインに関する調査についてはオープンデータなどウェブサイト上に公開されているものを収集し、現地関係者には電子メールやビデオ通話アプリなどを利用した追加調査を行った。ここまでに得られた研究成果の一部は、セミナーや学会報告の形で公表した。

畠中昌教(2022a).「スペインのサンティアゴ巡礼とツーリズム（観光)」. 岡山民俗学会６月例会. 2022 年 6 月 25 日, Zoom によるオンライン形式.（口頭発表, 日本語）

畠中昌教(2022b).「ガリシアの観光：緑・青・灰」. 2022 年度　関西外国語大学大イベロアメリカ研究センター公開講座. 2022 年 7 月 8 日, 関西外国語大学（大阪府枚方市）.（招待講演, 口頭発表, 日本語）

畠中昌教(2022c).「スペイン北部ピコス・デ・エウロパ国立公園の１００年」. スペイン史学会第 190 回定例研究会. 2022 年 12 月 3 日, Zoom によるオンライン形式.（口頭発表, 日本語）

畠中昌教(2023a).「スペインのワインツーリズムと地域文化」. 発酵とサステナブルな地域社会研究　所「酵母とワイン文化」セミナー. 2023 年 2 月 18 日, グランシップ（静岡県静岡市）.（口頭発表, 日本語）

２．研究員発表会

例年、研究員による研究発表会を年に１回開催しておりましたが、2022 年度は新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、研究報告書の提出をもって発表に代えることといたしました。

	研究員氏名	タイトル
1	今村　義臣	地域在住の高齢者における宗教性と愛着機能の関係についての予備的検討
2	陳　　宥蓉	カーボンニュートラルに向けてカーボンプライシングの導入状況についての考察
3	髙木　恵	律令期の国府・国分寺の立地に関する一考察 ―歴史地震から見る陸奥国府・多賀城―
4	天満　翔	日本における自閉スペクトラム症のロールシャッハ研究の文献展望
5	若杉　優貴	東京都心の大型再開発による「文化発信拠点店舗」への影響 ―渋谷桜丘を事例として―
6	池田　博章	介護福祉士養成校の留学生における国家試験の結果と日本語能力との関連分析
7	城戸　由香里	認知症予防を目的とした音楽療法 ―楽器演奏プログラムの効果―
8	丁　　青	中国における自動車企業の環境マーケティング・コミュニケーション戦略の構築に関する研究 ―トヨタ自動車の事例研究として―
9	中畑　義明	在米日本人会会長牛島謹爾と渋沢栄一の民間外交
10	永吉　守	近代化遺産・産業遺産をめぐる植民地性 ―三池炭鉱の地を事例として―

３．日誌

２０２０年（令和２年）

６月１７日（水）　比較文化研究所運営会議（書面）
１０月　１日（木）　比較文化研究所運営会議（書面）
１２月１０日（木）　比較文化研究所運営会議（書面）

２０２１年（令和３年）

１月１５日（金）　比較文化研究所運営会議（書面）
２月１６日（火）　比較文化研究所会議
２月２２日（月）　比較文化研究所運営会議（書面）
２月２５日（木）　比較文化研究所協議会（書面）
３月２３日（火）　比較文化研究所会議（書面）

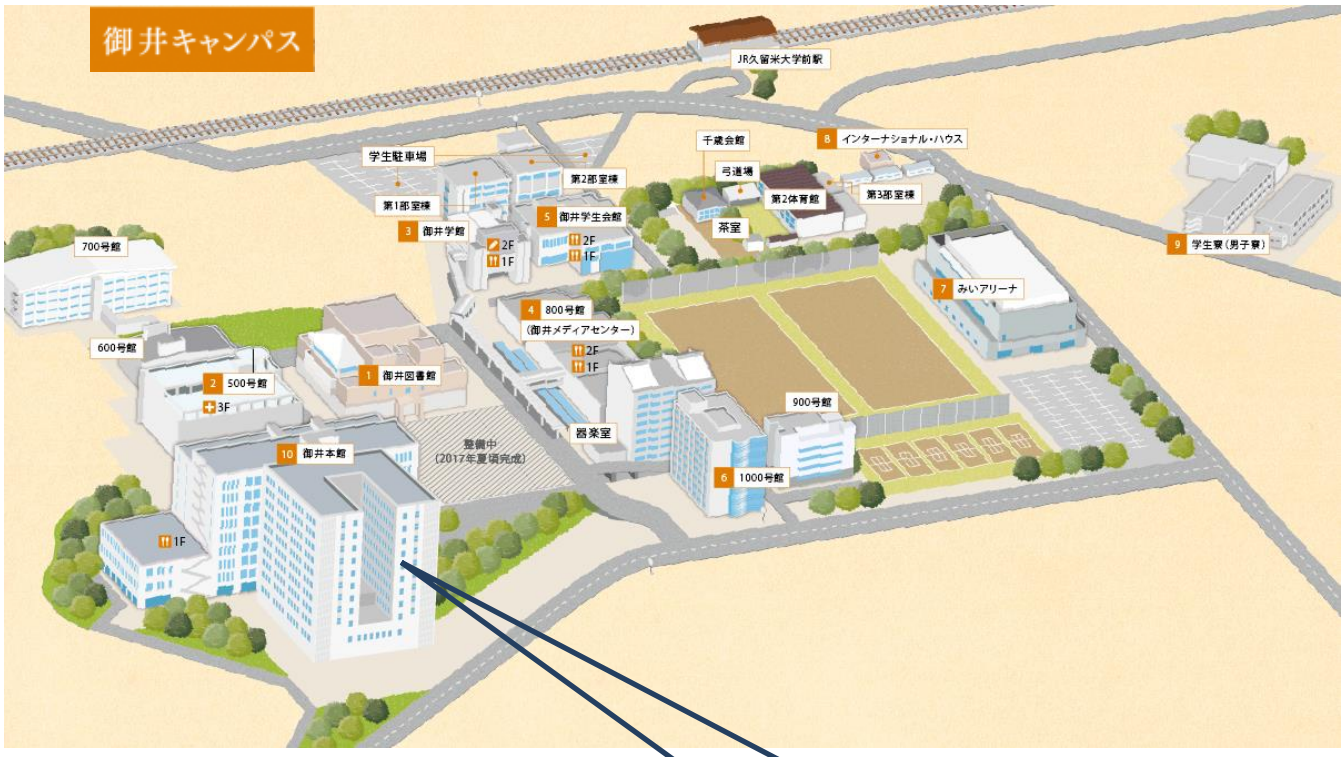
※部会活動を除く

施設・設備

比較文化研究所は、1987 年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館 3 階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された 1989 年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2015 年 3 月に現在の御井本館 8 階に移動しています。研究所の部屋は 3 室あり、それぞれ研究所長室、会議・研究会用、および資料室・作業室として使用しています。

研究所の資料室には、紀元前 3 世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する図書が保管されています。これは、元佐賀テレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。

［案内図］



御井本館　８階
○比較文化研究所長室
○研究室
○共同研究室